

海 (かいし) 市

No. 14

● 詩

02 横山 仁 無心のひと

04 前田 勉 気付き

● エッセイ

08 片津 森 伝説のある山「龍馬山」に登る

14 佐藤ただし 水田とツバメ (12)

17 横山 仁 雑記 (14)

無心のひと

横山 仁

四季の色と

象瀉の海風をひろい

つかいなれた石臼へ

お山の清寂の水を沸かし

悠久の器へ注ぐ

かき混ぜる

かき混ぜる

空を

かきまぜる

泡立ってくる　いのちの粒
見開いてくる　ひかりの目

やがて

コトバは結晶し

無心の詩が

彼の岸で

立ちさわぐ

あら、梅の花が……

*先達詩人、今川洋さんのイメージから

注、「あきたの賦」掲載分に致命的な誤植があり、再掲する。

気付き

前田 勉

季節から解かれた

十一月の傾いた陽が

隣家の庇の切っ先にまつわりついている

色のない一条の陽射しが

淡い乳白色の壁を這いはじめ

しばらくすると

羽虫の群れが

光の束のなかで

くすぶった煙になってゆれる

いつからこうしていたのだったか

右目の端に鏡を意識したとき

呆けたように

窓の外を見ている人がひとり

その鏡の中で座っていた

祖母のようでもあり

晩年の母のようでもあり

その横顔は

わたしでもあった

今日も

朝のあいさつとひとり言

吐くコトバは限られていた

少しだけの語彙

わずかな時間

コトバの数はこれで十分だと

気付いた

羽虫の群れは

定めたことでもあるかのよう

ゆらゆらと

身もだえるようにうごめいては

少しずつ

その束からはみ出し

かたちのない夕景に紛れこんでいく

この無音の小さな世界

こうして一日はつくられていた

伝説のある山「龍馬山」に登る

片津 森

一〇月、龍馬山に登るイベントがあると新聞で知った。山の名をネットで調べると、由利本荘市中心部から東に一〇キロほど先の北ノ股地域にあつて、標高三七八・四mの山だ。

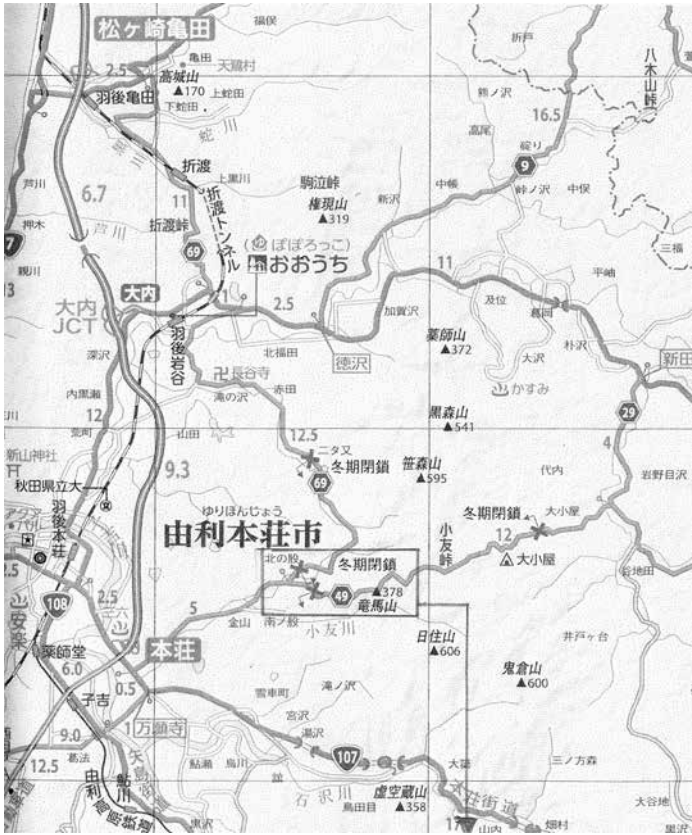
このところ山から遠ざかっていたし、低山でもいいから山歩きたい気持ちで早速参加を申し込んだ。主催は由利本荘市の小友地域振興会。申込の時に、登山と銘打ったがハイキング程度なので、登山靴でもいいけれど皆さんゴム長で参加されますよ、という話をされた。

*

月も押し迫った日曜日の午後、雨雲が広がり、いつ降られてもおかしくない天気。日本海東北自動車道本

荘ICを降りると、国道一〇七号(本荘く横手)に出合ったら左(南東方向)に進む。1km弱で信号を左折し、県道四九号に入ると間もなく左手に集合場所の小友公民館が見つかった。駐車場入口手前にまだ新しい「龍馬山9km」の案内標示があつた。ほお、今回のイベントといい、地域外の人にも案内している様子。地元では親しまれている山のような。玄関先では雨具にゴム長の高齢の男女がたむろしていた。受付でお金を出していている人もいたので尋ねると、下山後に懇親会をやるのだそうだ。秋田市内から車で来たので、というと、懇親会は地元の人を中心なので、無理して出ることはないですよ、と言われ、ごもつとも、下山して戻ったらすぐに帰りますとこたえた。名前のチェックが済み、今日のスケジュール表と龍馬山のルート図、この山に関する伝説の載った印刷物が手渡された。資料は透明なクリアファイルに入っていて、主催者の心配りが感じられた。

開会式で、このイベントは振興会が由利本荘市の地域づくり推進事業の補助金を得て行っていること、毎年、稲刈りの終わつたこの時期に開催され、今年で八



回目であること、山と同じ名前の地酒があること等會長さんからの説明があった。今日は私を含め地域外から来た参加者と、振興会会員（町内会長さんたちだろうか。ほかの代表の人もいるかもしれない。）が集まり、全部で三〇人ほどになった。これから登る龍馬山の名前は、水の神である龍と、かつて家族の一員であった馬に由来するのだそうだ。

そんな話を聞いた後、外からの参加者はマイクロバスに乗り込み、地元の人たちはマイカーで山へ向かった。

*

県道四九号を山に向かう。やがて隣席の人が「あれが龍馬山です」と指差して教えてくれた。三角おむすびのような形の山が、背後の山並みの前に姿を見せている。山の名の読みは「りゅうばさん」というのだそうだ。道は左方向・赤田の方へ行く県道六九号を分けてから、右へ延びている。この分岐点に「龍馬山この先4km」の標示が立っていた。一月に入るとこの道は冬期間閉鎖されとのこと。今日が今シーズン最後の機会になる。バスは勾配のあまりない路を行く。

両側はスギ林になっている。

この道は北ノ股から丘陵地を越え、上川大内岩野目沢に至る道で、その先では横手市大森町に通じている。昔、岩野目沢の人たちは本荘の町に出るのに七里の危険な路を往来しなければならなかった。これを見かねた北ノ股地域の小松権之丞は明治五年、県に請い凹凸を均し三里に短縮する道（権之丞新道）を開いて人馬の往来を可能にした。この工事は権之丞が私費を投じ一二年くらいかかったという。県道四九号は昭和年代に整備開通されたが、手渡された地図ではその一部が権之丞新道のルート上に造られている。

窓外には広葉樹が混じり始め、北ノ股公民館から一〇分かつらずにバスは止まった。ここから登るのだらしい。下車したところに登山口を示す白い標示板が立っていた。

山に入ってみると広めの路が奥へ伸びていた。市の補助金で振興会のメンバーがこの路の草刈りや倒木の除伐を行ってきたのだという。落葉の敷き詰められた路はふかふかで、スギの枝先もあちこちに落ちていた。先日の台風で折れて飛ばされたものだろう。途中、

白い指導標が立っていた。今回は団体で登っているが、一人初めての路でこうした案内標示に出会うと安心して進んでゆける。先を行く会長さんが時折振り向いては説明をしてくれる。今日はあいにくの曇天で見えませんが、向こうに海が見えます。といつても最近はずが伸びて視界がなかなかきまませんが。手前には本荘市街があつて、その先に日本海が見えるんです。指さす方に目を凝らすと確かに海の色をして水平線をつくっているのが分かった。勾配の緩い路は徐々に細くなり、左下に崖をつくっている。時折、赤く色づいたモミジがあつた。

やがて、路が広くなると「イ」の字型の分岐になつていて指導標があつた。ここから右に折れて登っていく。すぐにコンクリートで固められた階段があつた。その端に金属の杭が数段ごとに打ち付けられ、ロープが張られているので支えになる。登りらしい登りはここくらいなもので、間もなく山頂に着いた。登山口からゆっくりしたペースで四〇分だったが、普通の歩きなら三〇分かけないで来れそうだ。境内も神社もさほどの広さではなかつた。堂内の正面の壁には「龍馬神

社」という額が掛かつていた。ほかにも何か掛かつていたので、長靴を脱いで上がつてみると、暗い色彩で定かではないが馬の絵馬が掛かつていた。龍馬の馬だな。

*

出発前に渡された資料の中に龍馬山の由来が二話載つていた。振興会が本荘市教育委員会「郷土の研究」から引用したもので、山の小さな沼地に住む龍馬という頭は龍、体が馬の生きものが住んでいたもので、山の名は龍馬山と名づけられたという話から始まっている。簡略にしてみると次のようになる。

龍馬がその使者だという馬頭観音が神社に祀られたので、龍馬山の祭りには、よい馬が授かるようにとたくさんの人がお参りに来たものだった。昔、一頭の白馬が龍馬山を一気に駆け登つたはいいが、かなり急な坂だったので降りることができず立往生していた。そこである力自慢がかけつけて力をだめて白馬の前足を背負い、後ろ足で歩かせながら、回り道をしてゆっくりとおろしたのだそうだ。その白馬

を村人は「神馬だ、龍馬の化身だ」と噂したのだという。「龍馬山 一」

龍馬は近くの村々の田畑を荒らしていたので、みな困り果て、赤田のお坊さん「閑居さま」に救いを求めた。閑居さまは龍馬に、岩山の頂上に「ほこら」を建て、村や田んぼと山との境界にすぎを植えるかわりに、村に入つてこないことを約束させた。村人は閑居さまの指図に従つてすぎを植え、山頂にほこらを建てて龍馬をまつた。以来、龍馬は村の田畑を荒らすこともなくなつた。「龍馬山 一二」

右の「ほこら」を建てて龍馬を祀つた。「二」話の後に「龍馬山の祭りにたくさんの方がお参りに来た」「二」話へとつなげれば筋ができそうだ。そう読むのが適當かどうかは別にして覚えやすい。

*

神社の境内の縁の土塁のようなどころに立つている数人が、遠くを眺めて何か同定しているようだった。あれが端っこでないか、という声の後、鳥海山の端っこが見えますよ、と知らせがあつた。層を重ねた雲の

下に、雲でも空でもない青っぽい傾きが西側の方へ下りている。それが鳥海山の端っこようだった。

鳥海山本体はあいにく雲のなかに姿を隠してほとんど見えなかつたけれども、自分たちが路を手入れしてきたこの山から鳥海山が見える、その鳥海山を見てもらつて土産にしてもらいたかつた、そんな気持ちだが、案内してくれている会長さんはじめ会員の人たちの様子から伝わつてきた。

会長さんが皆を集めて集合写真を撮ることになつた。三脚を立てたカメラマンが、自分の入る位置と往復して三度シャッターを切つたが、その際に午後になつて初めての雨が落ち始めた。会長さんの声掛けとともに下山開始。先ほどの急な階段を慎重に降りる。イの字の分岐を戻らずに今度は右へゆくと、何のことはない登山口のあつた県道四九号を上に進んだところにたどり着いたのだつた。

バスに乗ると、次は小友峠に向かつた。今日のイベントのタイトルが「龍馬山とその周辺 探索登山」だったが、周辺とは小友峠のことだったか。車内の湿気で曇つてきた窓を手のひらで拭つたりしているうち

に、右側の林が開けてくるとスギの伐採地が広がっていた。晴れていればここから鳥海山がよく見えるんですが今日は残念です、と会長さん。いやいや降られる前に集合写真が撮れたし、よかったヨ。峠まできたものの景色は雨と霧に隠され、下車することなくUターンして帰路を下った。

公民館に戻って無事解散。振興会の人たちは、これからハバキヌキの宴だな。きつと開会式で紹介されていた地酒「龍馬山」で盛り上がるのだろう。標高四〇〇mにも達しない低山だったが、伝説が残り、地域の人たちが大事にしているいい山だった。

追記

・龍馬山と打ち込んでネット検索すると、数人の登山記録を閲覧できる。また、同名の山が秋田市内にもあるのが分かった。下新城白山の付近にあり、そこも標高三六〇mほど。まれに登山者もいるよううで、記録を見ることができ。

・山形県最上郡金山町（湯沢市から国道一三号で南下し、山形県に入るとすぐの町）にも竜馬山があ

る。上半身が白竜、下半身が馬の怪物が住んで、人々から恐れられてきたという伝説があるようだ。

水田とツバメ（一二）

佐藤 ただし

・地に足の付いたカラスの行動

家の畑の隅に二坪程の肥塚を作っている。堆肥を作る場所のことで、この辺ではコズゲと呼んでいる。コズゲの「ズ」は「ジ」のようにも聞こえ、どちらが本当なのか定かではない。堆肥のことをコエと呼び、塚はツカが訛ってズゲになり、コエズゲが縮んでコズゲとなったのだろうと解釈している。（注）

子供の頃はよくここへミミズを採りに来て、缶詰の空き缶に入れて魚釣りに行ったものだ。

ここに時々野菜くずや残飯を家から持って来て捨てている。時間は決まっていないが、大体午前中になることが多い。残飯を捨てた後、しばらくすると二羽の

ハシボソガラスが残飯を捨てたあたりを嘴でほじくり返している。その様子を見てみると、この頃、畑に来るようになった私を警戒しているのか、気付かれないように、遠慮がちに物色しているようで、電線や木の枝に止まっている時のような野生味が影を潜め、しおらしくしているようにさえ見える。

彼らはここで食事をした後、どこへともなく飛んで行き、数時間もするとまた畑へ戻って来て、エサを探している。そして午後になるとビニールを掛けていないパイプハウスの屋根や近くの標識に止まって、じっとしていることが多い。

この二羽のカラスはこの辺を縄張りに行っているのか、ここへ来るのはいつも同じカラスだ。なぜ同じカラスと分かったかという点、一羽の首の回りの羽根が抜けていて、少々みすぼらしい恰好で過ごしていたことがあり、他のカラスと見分けがついたからだ。ある日、別のカラスがこの肥塚にやって来た時、このカラスがすぐに飛んできて、追い出したことがあった。それを見ていて、カラスが縄張りを持つということが納得できた。

彼らは私のことを憶えているのか、そばを通つても飛び去らないことがある、その距離は大体五メートル位で、それより近づくと飛び去るようだ。

ある時、軽トラで畑へ通じる道路を通ると、道路脇にタマゴの殻が一つ落ちていた。タマゴの殻を見て、これはあのカラスの仕業だとすぐにピンときた私は、急いでその殻を拾って帰ったことがあった。

また、カラスは食料を貯蔵すると言われているがそれはどうやら本当のことのようだ。ある秋の日の午後、残飯を持つて行つて捨てる時、彼らがやつて来て、そろそろと残飯をほじくり返していた。そのうち一羽がニワトリの手羽元の骨を啜えて歩き出し、少し離れた畑の畝の谷間に落として、嘴で畝の土を掛けて隠したのだった。そこは畝を作つて間もない所で、土も柔らかいため嘴で簡単に土を寄せることが出来る場所だった。そして間もなくもう一羽も同じように骨を啜えて、反対方向へ歩いて行き、同じように畝の間に置いて土を掛けていた。そこは別の持ち主の畑だった。

この季節になると、畑から得られるエサは多くは無と思う。私が時々持つてくる残飯が唯一の食料に

なっていることもあるかも知れない。それでも、エサとなるものは何でも食べて、遅しく生き延びてゆく。

私の母は早朝に畑に行くことが多いが、近くにこのカラスがやつて来ると『カラスさんおはよう』と挨拶をし、話しかけているという。元々話好きということもあるが、カラスに話しかけることで、自分はある程度の敵ではないから、あなた達も畑にいたずらをしないようにと伝えているそうだ。そのせいか、彼らのお陰で他のカラス達にいたずらをされたことは無いと言つていた。言葉は通じないが以心伝心というか、通じる部分があるのかもしれない。

また、知り合いの畜産農家の家族から聞いた話だが、朝になると家の前の木にカラスが一羽飛んできて、その家のIさんが外に出てくるのを待っているという。Iさんが家から出てくると、そのカラスは木から飛び降り、歩いてIさんの後を付いてくるのだという。Iさんはそのカラスに、自分のために買った食パンのうち一枚を与え、その他にウインナーなど、カラスの好物が朝食にあると、家族に内緒で紙に包んでポケットに入れ、カラスにあげているという。今ではパンを手

に持っているとかラスはそばにやって来て口にくわえ、近くに隠してまた欲しがるという。

Iさんがカラスにそこまでするのは、もともと動物好きということもあるが、そのカラスがこの辺を縄張りに行っているので、牛舎にやって来る他のカラスが、飼料の袋を破いて、いたずらをするのを防いでくれるからだという。

鳥の中でもカラスのように縄張りを持つ鳥は、地に足をしっかり付けて人と共存しているようだ。

(注)『秋田方言』(発行所・株式会社国書刊行会)によると、「肥塚」について、旧市郡名で南秋田、秋田河辺、平鹿、仙北郡は、「こんずげあ」、山本郡は「こんずげ」となっている。また、堆肥置き場の呼び方として由利郡は「こんじげあ」となっている。

雑記 (14)

横山 仁

以前、たとえば市町村合併でできた地名なのに（合併した市町村の地名をそれぞれ一文字ずつとってつけた、など）、それをアイヌ語地名（？）云々といったような、とんでも話があったらしい。

芭蕉の「おくのほそ道」の「十二 須賀川」に、「栗といふ文字は西の木と書いて西方」とあった。西木村の栗は、そういつたことで名産にしようとしたのかなど単純に思ったら、西明寺と松木内から西木はつけられたという。つまり、合併以前から西明寺栗は有名だったようだ。

「ようこそ！「かたくり館」へのホームページでは「300年以上前、京都の丹波地方、岐阜の養老地方より現在の秋田県仙北市西木町小山田地区（旧西明

寺村）に種を持ち込み栽培したところ、大きな実を付ける個体が生まれ、その種を改良した栗が「西明寺栗」と言われております。早生種が10月初旬頃、晩生種が10月中旬頃から最盛期に入ります。」とあった。

また、「Wikipedia」では、「西明寺栗（さいみやうじぐり）は、秋田県仙北市西木にある西明寺地区特産の大粒のクリ。ルーツは、300年以上前に遡り、関ヶ原の合戦後、秋田藩主となった佐竹義宣公が和栗の原産地である京都の丹波地方や岐阜の養老地方より栗の種を取り寄せ、北浦地方（現在の秋田県仙北市）で栽培を奨励したことにあるとされる。」とあった。

「おくのほそ道」をみていて、例の「松島やあお松島や松島や」がないことに気づいた。「俳星松尾芭蕉・みちのくの足跡」というホームページによれば、『松島やあお松島や松島や』の句が広く知られ、これが芭蕉作と言われることがあるが、実際は、江戸時代後期に相模国（神奈川県）の狂歌師・田原坊が作ったもの。仙台藩の儒者・桜田欽齊著『松島図誌』に載った田原

坊の『松嶋やさてまつしまや松嶋や』の『さて』が『あ
あ』に変化し、今に伝えられている。」とあった。

*

「秋田の詩祭 2018」での山形県詩人会・近江正人
氏の演題は、「土に叫ぶ 義農松田甚次郎～宮沢賢治
を生きた人～」というもので、松田甚次郎という人は
しらなかつたので新鮮だった。資料には、「最上共働
村塾の修了者 秋田県仁賀保町の斎藤忍(昭和10年)」
などが、紹介されている。その後、ネットで検索して
みたら、新庄市役所の広報(2013年12月号)で、「特
集 理想郷(イーハトーブ)に生きた男たち 郷土の
偉人松田甚次郎」を組んでいた。

また、松田甚次郎の『土に叫ぶ』(昭和13年)を
出版したのは、羽田武嗣郎たけしろうだが、先号で紹介した、ク
ラヅ通いの国民民主党・羽田雄一郎(「霞が関ゾロ
カーと交際、国民・羽田雄一郎氏を『党内聴取』文
科汚職」夕刊フジ 2018.8.31)の祖父だった。

祖父の心、孫知らずというべきか。

また、別の人から教えてもらったのだが、鷹巣農林
高校の5代柘植校長が、盛岡高等農林高校で宮沢賢治
を教えていたことだった。当時の教職員などは、
宮沢賢治のことをなにかきいていたかもしれないと
も思ったが、まだ有名ではなかつたかもしれない。ち
なみに、『春と修羅 第一集』の「習作」などに登場
しているとのこと。以下、青空文庫より(一部、《
内はルビ)。

は | ほうこの麦の間に何を播いたんだ
そ | すぎなだ
ら | すぎなを麦の間作ですか
へ | 柘植《つげ》さんが
と | ひやかしに云つてゐるやうな
ん | そんな口調《くてう》がちやんとひとり
で | 私の中に棲んでゐる
行 | 和賀《わか》の混《こ》んだ松並木のときだ
つて
く | さうだ

*

亀谷健樹さんの「はがき禅 第九六一信」（平成三十年十月十五日）に

「かつてわが宗門は〈曹洞土民〉といわれた。〈臨済将軍〉を対句とする。だが『土民』は土に根ざした民であり佛の命脈を保つ普通の人である。土があればこそ佛縁が成熟し受け継がれるのだ。」とあった。初めて目にしたことだったので調べてみた。（引用の正字を、一部常用漢字に直した）

石田瑞麿『例文仏教語大辞典』（小学館、一九九七）では、「曹洞宗の土田夫（どでんぶ） 曹洞宗の禅風をいったもの。その宗風が田夫野人にもわかりやすく、懇切丁寧であることをいう。『曹洞土民』ともいい、『臨済将軍』という表現と並称される。ただし、「臨済将軍」の見出しはない。

駒澤大学内禪学大辞典編纂所編『禪学大辞典』（大修館書店、昭和五十三年）では、「曹洞宗の宗風のとえ。農夫が黙々と田畑を耕すように、曹洞の宗風の

隠密なことより称された語。また道元・磐山の門下の人人が、鎌倉・京都の五山を中心として展開した臨済宗に対して、関東・東北・九州をはじめとした地方で活躍したことからもういふ。ちなみに「臨済将軍」は、「臨済の宗風を示した語。法眼の〔宗門十規論〕では『臨済則互換為し（注、し点）機』と評して、この宗風が師家と学人の商量問酬（注、禅問答のこと）の上における互換の機鋒を活潑濠地に行じて、生殺与奪の機を弄していく峻厳な宗風が、あたかも将軍が三軍を叱咤するに比せられることよりいふ。曹洞土民・雲門天子の語も対比して用いられる」とある。

こむずかしく説明されてよくわからないが、ようは臨済宗が「看話禅」（一つの公案を工夫し、それを理解し終えた時は、また他の公案の工夫に移るといふようにして、大悟に至らうとする臨済宗の禅風をいう。曹洞の禅風である黙照禅に対していわれた語で、梯子禅ともいう。『例文仏教語大辞典』）ということだろう。

「雲門天子」（うんもんてんし）については、「雲門宗の宗風を評した語。雲門宗の宗風は、天子の詔勅のように一度で万機が決定されて、再問再応の猶予が

与えられない接化ぶりであるという意。」

『講座禅』「第三卷 禅の歴史—中国—」（筑摩書房、昭和四十二年）には、「この点について白隠は『臨済将軍、曹洞土民、瀧仰公卿、雲門天子、法眼商人』と端的な評語を下し』とあるから、白隠が評したものが。「雲門」の項の執筆は柴山全慶氏）
ちなみに、日本には雲門宗は伝えられていない。

*

保坂英世さんの個人誌「四季彩」4号に、替え歌が紹介されている。

「♪お手テンゾラ食べすぎて
アチャコ先生に診てもらった
「あーあ もう駄目だ
神経衰弱 脳膜炎」
晴れたお空に葬式あげた♪」

知人にきいても、だれもしらなかつた。
ネットの、ブログ「SP盤雑学ノート」には、以下

の替え歌が挙げられていた。

(引用開始)
♪ お手 天ぶら 食べ過ぎて
エノケン先生 (せんせ) に 診てもらて
坊や もうあかん 発疹チフスのなりぞこない
お手手 合わせて ナンナイダブツ

童謡『靴が鳴る』の替え歌で、筆者の母(昭和16年生まれ)が小学生の時、男子同級生たちがうたっていたという文句を書きとったものである。昭和20年代。

文句の中には、喜劇王といわれた喜劇俳優の「エノケン」こと榎本健一が入っている。
エノケンは戦後もまだまだ子供に人気があったようだ。発疹チフスが出てくるあたりが時代を感じさせる。『靴が鳴る』の替え歌は、様々なバリエーションがあるようだ。

(引用終わり)

また、「四級猫」さんのブログには、次のようにある。

*

(引用開始)

昔「原爆マドロ」(お手手つないで)の替え歌が流行った

おてテソプヲ食べ過ぎて

あちゃこせんせに診てもらた

あーあもうダメだ

神経衰弱、脳膜炎

あーしたのおかずは原爆マドロ

(福島原発問題の、風評被害に腹がたったので、載せる。40才以上は黙って食え)

(引用終わり)

保坂さんのと、四級猫さんののは、似ているので、同時期のものか。ちなみに、「サザエさん」(1957年8月15日)では、「セシウム137」が話題に上っている。

「NHKの紅白歌合戦の出演が内定していると噂の韓国のK-POPグループ「BTS(防弾少年団)」のメンバー、ジミョンさんが原爆などの画像がプリントされたTシャツを着用して物議を醸しているようです。ナチス武装親衛隊のコスプレ、リーダーによる原爆ジャンパーの着用、東日本大震災を彷彿とさせるMV等も話題に。」(matome.naver.jp)

これにたいして、アメリカの「サイモン・ヴェーゼンタール・センター」が苦情を述べてはじめて日本のマスコミが取り上げた。同センターは、ナチスだけでなく原爆も話題にしていたが、NHKは、7時のニュースで「韓国アイトルのナチス帽 米ユダヤ系団体が非難 米ユダヤ系人権団体“ナチスの被害者に謝罪すべきだ”」と、原爆に関してはスルーして報道した。(11月12日「アノニマス ポスト」)

以下、「アノニマス ポスト」さんより一部転載。

(引用開始)

【BTS】ユダヤ系団体「原爆被害者をあざけるTシャ
ツの着用は、過去をあざけるこのグループの最新の事
例にすぎない」「日本人とナチズムの犠牲者たちに謝
罪するだけでは不十分」～ネット「それでも被爆者団
体はダンマリw」「広島、長崎はなんで抗議しないの？」

(keroyon301さんのツイート)

結局、広島や長崎で平和を訴えている団体の構成員や
後ろ盾が、防少が問題視されると困る連中だというこ
とを如実に証明している。スエス政府編の民間防衛
に、平和活動家は平和の仮面を被り国益を損なう活動
をするので注意せよと書かれてあるが、まさにそれだ
ろう。

(引用終わり)

けつきよく、紅白の出場は、なくなつたようだが、
もう一つ、これに関してのTBSの報道について。

(引用開始)

(enny01410414さんのツイート)

TBSの手にかかればジミンが言った「心配かけてすみ
ません」が「本当にごめんなさい日本の皆さん」と変
換されます (絵文字あり)

(るさんのリツイート)

ジミンは「心配かけてすみません」とすら言つてませ
ん (絵文字あり)「全世界のフアンズの皆さんが心配さ
れたと思います」としか言っていないので、全く謝罪に
なっていないですね…」

(引用終わり)

これに対して、作家の百田尚樹氏は、TBSはだれ
のために(だれを付度して)、何のためにやったのかと。

また、「アノニマスポスト」さんより。11月25日

(引用開始)

高須院長「嘘つき謝罪通訳の責任者は誰だよ」 B
TSの「本当にごめんなさい、日本の皆さん」発言の
フエイクニュースを報道したTBSへ憤慨～ネット

「ステージで言ったのはインザルじゃなく日本語だよ。だから意図的な捏造じゃない？」

(引用終わり)

*

金が残ってる) *

もうひとつ、「CanNA」さんから。2018年11月17日

(引用開始)

NHK大河ドラマの危険性。

『私が「史実とかけ離れていませんか？」と聞いたら、プロデューサーは「NHKでやったことが史実になるから、それでいいんだよ。』』

出典：『こんなメディアや政党はもういらぬ』和田政宗参議院議員・元NHKアナウンサー

(この記事へのhiroさんのツイート)

大河は「この物語はフイクションです」の注釈をつけるべき。

(この記事への「とーちゃん」さんのツイート)

大河ドラマを史実になると考えているのが視聴者ではなくプロデューサーなのが一番ビックリ！

ついでに、ゴミのNHKに関して、「もりちゃん」さんから。6月7日

(引用開始)

【NHKの受信料が高すぎる根拠】

- 7442億円の純資産がある (お金が残ってる)
- 現預金だけで900億円持つてる (お金が残ってる)
- 平均年収は庶民の2.5倍の1083万円 (お金が残ってる)
- 余ったお金で年間650億円の証券投資している (お

じゃ、今度大河ドラマは「必殺仕事人」にしよう！
(引用終わり)

辻元清美（政治献金あり）とズブズブの関西生コンの幹部がこれまで二十数名恐喝未遂などで逮捕されたが、全国紙は、デジタル版では小さく扱っても、紙媒体では、産経新聞しか報道していないという。なぜ？

あとがき

◆今年、何度も日本列島を襲った自然災害。豪雨、台風、猛暑、地震。上からも下からも来た。これから「われわれが今まで経験したことのない」レベルの自然災害があちこちで起きれば、仮に被災地から離れていても、落ち着き払ってなどいられなくなるかも。おおっと、人間の間にだって分断とか移民とか「経験したことのない」いろんな兆しが現れてきた。地球規模で。これだってなあ。(K)

◆冬が近づくとカモやハクチョウなどの渡り鳥が秋田にやって来て、河川や海岸で見かけるようになる。それから嘴の根元に特徴のあるミヤマガラスやコクマルガラスという小型のガラスの仲間も見かけるようになる。これから寒くなる秋田に、わざわざやって来てくれる鳥たちを見て歩きたいと思う。(T)

◆「密林に浮かび上がるマヤ文明の遺跡 レーザー技術で発見」という記事(CNN.co.jp 2018.08.18)を興味深くみていたところ、11月17日の魁に「大館片貝家ノ下遺跡 レーダー探査」、「遺構を破壊することなく調査できる」とあり、発掘方法も進んだものだ……と。(J)

◆プロバイダーのサービス終了を機に、19年間続けてきたホームページ『窓枠大の空』を明年3月で閉じることにした。気が向けばまた別の形で再開してみたい。尚、ブログ『陽だまりの中のなか』は今まで通り継続予定。と書いたところで、双方とも認知度は低いからどうでもいいことなのだろうが……。(B)

「海市」 第14号

2018年12月12日発行

発行 書肆えん

秋田市新屋松美町5-6 横山方